

## はじめに

現代日本社会に生きる女性たちにとって、妊娠・出産は依然として重要な出来事である。しかも、それは多くの女性たちにとって、単に医療的な事柄であるだけでなく特別な意味や価値を伴う体験として受け取られている。妊娠・出産が、霊的、精神的、超越的な意味を含む宗教的な事象を指すスピリチュアリティと接続しているのは、そうした理由に基づいている。

では、妊娠・出産のスピリチュアリティがどのような内容を現代社会に示しているのだろうか。それが社会に広まった背景として、何が考えられるのだろうか。こうした問題について考えてみるのが、本書の主題である。

触れたように、スピリチュアリティという言葉は、今日におけるある種の宗教的動向を指す概念としても使われる。すなわち、既存の宗教とは異なり、霊的、超越的な事柄を求める人びとが個々人で聖性を求める体験を希求しながらも、特有の世界観を共有する動向がスピリチュアリティと呼ばれる。スピリチュアリティには教義や教団組織がないのが特

徴であるが、生成される価値観や世界観はモノや情報を媒介として広まりを示すことがある。さらに、それらのモノや情報の一部はコンテンツとして金銭を介してやりとりされるようになり、ここに「スピリチュアル市場」が誕生した。

「スピリチュアル市場」は、日本社会において女性を中心に一定の広がりを示している。そこでやりとりされるコンテンツの大部分が女性向けであり、関連するイベントの参加者もほとんどが女性であることから、そう言って間違いないだろう。こうしたコンテンツは、スピリチュアリティに関心が薄い層にもテレビ番組や雑誌、書籍、ウェブサイトなどのメディアを通して浸透している。具体的なコンテンツとして、人が放つ霊的な力だという「オーラ」とか、特別な「気」を有する場所とされる「パワースポット」、特殊な力を秘める石とされる「パワーストーン」などが挙げられる。

「スピリチュアル市場」のなかでも急速に注目されるようになったのが、女性にとって重要な出来事である妊娠・出産に関連するコンテンツである。例えば、例年八月に開催される「スピリチュアル市場」の代表的なイベントの「癒しフェア」では、妊娠・出産に向けた心構えや不妊治療、あるいは代替療法を用いた育児法に関する講演会が開催されてきた。会場では妊娠・出産に効果があるとされるスピリチュアルなグッズや、関連する書籍や雑

誌などが販売されたりしている。さらに妊娠・出産に関するコンテンツは、メディアを通して社会に広まりを見せた。例えば、関連する書籍がベストセラーになったり、映画が人気を集めたりしていることや、一般女性誌などでも関連するトピックがしばしば取り上げられていることが挙げられる。

その典型的な例が本書で取り上げる、妊娠・出産をつかさど司る臓器である子宮を重視して聖性を付与する「子宮系」、生まれてきた子どもは母親の胎内にいた時のことを記憶していると主張する「胎内記憶」、そして過度に医療に頼らずに女性ができるだけ「自然」なやり方で出産することを推奨する「自然なお産」なのである。

これらのコンテンツは、子どもを産み育てることの価値について確信を持てるように鼓舞することで、女性たちを妊娠・出産に向けて後押しするという内容が含まれている。そこには、産むことを決断する意味や価値を、自分の内側に積極的に見いださなければならぬ日本の現況がある。

なぜならこの社会は、妊娠・出産を経て子どもを持つことに伴う負担を女性だけに課し、常に決断と絶え間のない努力を女性だけに要求してくる。さまざまな困難を経て子どもを産んだとしても、子どもが健やかに成長し、豊かな未来が開けるといふ確かな展望を持つ

ことができるわけではない。

こうした社会に子どもを産み出すという決断が困難であればこそ、妊娠・出産が素晴らしい体験であることを願う女性たちの思いに、一層切実なものがあることは想像に難くない。スピリチュアリティは、そんな女性たちの妊娠・出産に対して、特別な価値や意味を付与するものとして現出したのではないだろうか。妊娠・出産が科学を基盤とする医療の管理下で行われる現代にありながら、スピリチュアリティと結びつけられる事情がここにある。

だが、このようなとらえ方が妥当かどうかは個々のコンテンツを検討した上で、吟味を要することであろう。なぜならこの社会における妊娠・出産の意味を改めて問い直すことも必要になるからである。そしてその目的のためには、女性の問題と向き合ってきたフェミニズムとの関係にも注目する必要がある。

このような理由から、本書は妊娠・出産をめぐるスピリチュアリティの現況を検討するために以下のような構成を取っている。第一章ではスピリチュアルやスピリチュアリティという言葉の持つ意味を確認しつつ、妊娠・出産が宗教や宗教的なものとのように関わってきたのかを明らかにする。次いで第二章では「子宮系」、第三章では「胎内記憶」、第

四章では「自然なお産」という具体的なコンテンツについて分析する。そして第五章では、妊娠・出産のスピリチュアリティとフェミニズムの関わりに目を向ける。これらを踏まえて、第六章では改めて、妊娠・出産をめぐるスピリチュアリティのありようが示す意味について総合的に考察する。

また、本書では妊娠・出産に関連する書籍を分析の対象として取り上げる。すでに述べたように、妊娠・出産のスピリチュアリティはメディアを通して広まってきたが、なかでも書籍の影響力が大きい。その理由として、関連する書籍が、書店で女性向けの自己啓発や健康情報のコーナーに置かれていたり、コンビニエンスストアでも販売されるなど、手軽に手に取りやすい状況にもなっていることが挙げられる。本書では「スピリチュアル市場」に注目するため二〇〇〇年代以降に出版された書籍を主に取り上げているが、場合によってはそれ以前の書籍にも注目した。なぜなら、後により詳しく論じるが、妊娠・出産のスピリチュアリティをめぐる言説はすでに一九八〇年代から現れているため、比較の対象として重要な意味を持つからである。

筆者はこれまで「スピリチュアル市場」の検討を進めるにあたって、実際に「市場」の現場に足を運んで調査を行ってきた。妊娠・出産に関連するコンテンツに対して、特に強

い関心が向けられていることも「市場」の現場で感じたことである。特に、二〇一一年三月一日に起こった東日本大震災と、続いて起こった福島第一原子力発電所事故の後では、その関心が一層熱を帯びたような印象を受けた。

しかし、スピリチュアリティについてはその事柄の性質上、フィールドワークで把握できることに限界がある。そもそも「スピリチュアル市場」でどのようなコンテンツが売買されているのかについて、現場では十分に把握することができない。そのためスピリチュアリティに関する研究は、必然的にメディア研究とも接続する必要があるということが議論されてきた。なかでも、現代日本社会におけるスピリチュアリティについて正面から検討している宗教学者の堀江宗正（のりちか）は『ポップ・スピリチュアリティ——メディア化された宗教性』（岩波書店、二〇一九年）のなかでその点を強く主張している。本書も同じ観点に立脚し、書籍を中心とするメディアに今回注目している。

ところで、「スピリチュアル市場」で妊娠・出産に関わるコンテンツが広まった理由として、女性たちの切実な思いがあることはすでに指摘した。だが、同時に危うさも目立つようになってきた。今日では妊娠・出産は医療に基づいて行われるのが一般的であり、医療の発展が死産率や妊婦の死亡率の大幅な減少をもたらしてきたことは疑いようがない。

しかし、もともと「スピリチュアル市場」で提供されるコンテンツのなかには、科学的な知見に反する内容が多く含まれており、なかには、医療の受診を妨げたり、健康に害を及ぼしかねないコンテンツも見られる。この点は、妊娠・出産に関わるコンテンツにおいても同様である。

「スピリチュアル市場」をめぐるのは、金銭問題が浮上するようになったことも見逃せない。「スピリチュアル市場」のコンテンツは金銭で賄われる消費財であり、それに傾倒すればするほど出費が嵩むことになる。「市場」で目立つインフルエンサーの影響を受けて、効果が定かではない商品を購入したり、参加費の高額な講演会やイベントに足繁く通ったりする女性もいる。最近では、実際に役立つとは思えない資格を取得するために、スピリチュアルに関連するスクーリングに通うケースもある。スピリチュアルなコンテンツに費やしている最中は気分が良くても、気が付いたら必要なお金さえ手元に残っていないという状況もありうるだろう。

ただし、宗教やスピリチュアリティに入れ込んで、生活に支障をきたすほど金銭を使い果たす人がいるのは今に始まったことではない。一九八〇年代から九〇年代にかけて興隆してきた宗教教団が、信者やその家族、さらには関係者に高額商品を購入させて、多額の

金銭を詐取する靈感商法が社会問題となった。靈感商法との相違も踏まえて、本書ではコンテンツそのものに注目しながら金銭問題についても取り上げる。

また、最近ではネットや新聞などでスピリチュアリティとナシヨナリズムとのつながりが注目されている。スピリチュアリティとナシヨナリズムの結びつきが注目されたのは、当時の首相夫人のスピリチュアリティに関わる行動が影響している。確かに、「スピリチュアル市場」でやりとりされるコンテンツには、強固なナシヨナリズムがあらかじめ組み込まれている場合もある。とはいえ、「スピリチュアル市場」におけるコンテンツは多様であり、ナシヨナリズムと親和性が高いものばかりというわけでもない。

しかし、妊娠・出産をめぐるスピリチュアリティにはナシヨナリズムとの親和性が高い傾向がうかがわれる。というのは、そもそも妊娠・出産自体が、少子化が国力との関係で問題視されたり、保守的な家族観に基づいて取り沙汰されたりする。それが、スピリチュアリティと接続するのは意外なことではなく、実際、「スピリチュアル市場」で妊娠・出産に関するコンテンツをリードするインフルエンサーがナシヨナリズムを強調する発言をしたり、保守的な家族観の流布を目指す団体に所属しているといったことは珍しくない。

だが、コンテンツの内容それ自体を検討すると、妊娠・出産のスピリチュアリティとナ



シヨナリズムは、従来の意味での保守的な国家観や家族観と異なる新たな関係が形成されてきて、複雑な様相を呈している。それは、妊娠・出産のスピリチュアリティが伝統宗教に依拠するよりも、新しいコンテンツとして社会に現出した理由と関係しているのである。本書では、妊娠・出産のスピリチュアリティとナシヨナリズムについても注目しながら、検討を進めていきたい。

ただし、本書は「スピリチュアル市場」における妊娠・出産のコンテンツを批判的な観点に限定した形で取り上げることとはしない。あくまで、資料が示す事柄に正面から向き合うことで、事態の全体像を描くことに最も重きを置いている。こうした女性向けのコンテンツを取り上げるとは、時に女性たちを「無知な存在」とみなしてジャッジするような権力関係を発生させる可能性を孕<sup>はら</sup>んでいるからである。しかし、それでは肝心の問題に対する正確な見方を歪<sup>ゆが</sup>めてしまう恐れがある。資料の分析にあたっては、詳細に検討しつつ、ある種の違和を感じた場合には、その都度言語化することを心がけた。それが、価値自由を原則とする社会学に基づく調査、研究において、資料に向き合う作法だと考えている。このことを改めて確認して、本題に入ることにしよう。